

情主義である。温情は字義から見て決して悪いことではない、寧ろ當然のことである。人間同志は常に温情を以て相持たなければならぬ。互に同情し合はなければならぬ。此れは歴史あつて以来不變なる道德の基調である。然るに此れが今日のやうに嫌はれるのは何故であるか。其の第一は、企業家が自己の爲に勞働者も働かせる手段として温情の假面を冠すからである。手段たる温情が却て人に不快の感を興へるのは今更なことではない。第二は、本心から出てゐるのではあるか、相手を自分より劣る者低き者として之を上から撫む慈むといふ氣分が貝え了からである。人格の自覺が未だ充分でなかつた時代には、此の意味の温情は以て協調の基礎となすに足つたのであるか、今や世界

を風靡し盡したるデモクラシーの思想は、人か人としこの關係に於て相對する場合には、其間に優劣高下ありと考へしめぬ。爰に至つて温情主義は止はや協調の事に終つたの資格を喪失した止の謂はぬはならぬ。即ち對等なる人格の相互尊重は協調の第一要素である。人格は既に對等である。然し此れは往々にして單なる言語であり、理想であるに留まる場合がある。實際に於て人は屢々利己心の爲に相手の人格を無視するのであつて、力に於て餘りに優劣の差があるときは、特に優者として此の誘惑に陥らうとすることが多いのである。而して現在の資本家と勞働者との間には、其の知識に於て、其の經濟的境遇に於て、又其の産業上の地位に於て、即ち約言すれば、其の社會的の力に於て著